911.362
Ta31
3 ㋒

百
俊

911.362-Ta31-3ウ
1200500756220

文庫
七

子規句解

始

101
/
175

百花文庫

子規句解

高濱虛子

創元社

911.362
TA31
3

東京文化財研究所

子規句解

高濱虛子

創元社

序

子規の句は別に古典を調べねば判らぬといふ句でも無く、又意味の難解なといふ句も無いやうである。たゞその句の面白味を判らす爲めには、或る點までの手引を必要とするやうに思ふのである。一見平凡のやうであつて、これではどこにその句の興味があるのか判らぬといふやうな句であつても、これにその句を鑑賞する心の用意を與へてやりさへすれば、直ちになるほど〻合點のゆく句が子規には多いのである。

が、この「子規句解」はさういふことを目的としたものではなく、私でなければ外の人には若くは後世の人には或は判らぬかもしれぬと思へる、その句を作つた時の環境とか、郷里の地名とかいふやうなものに就て、ふと氣のついたものを取り出して簡單な註釋を加へただけのものである。まゝ筆が走つて他のことに及んだものがあるかも知れぬが、それは本意ではなかつたのである。

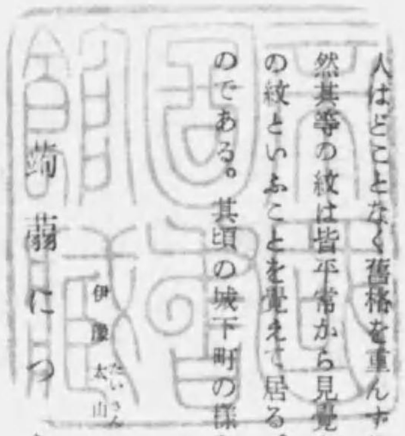
昭和二十一年四月十四日

小諸山廬にて

高濱虛子

元朝や皆見覺えの紋所（明治廿五年）

これは、今の若い人などにはそれ程に感じられないかも知れないのであるが、まだ維新を去ること遠からぬ時代にあつては、四國の松山といふやうな邊鄙の城下町では、十分と云はれる人はどことなく舊格を重んずる傾があつて、皆家々の紋所の著いてをるものをよく用ゐた。自然其等の紋は皆平常から見覺えがあるので鷹の羽の紋はどこそこの紋、抱茗荷の紋はどこそこの紋といふことを覺えて居る。新年には其等の紋をつけた紋服の人が年始に來る樣を言つたものである。其頃の城下町の樣を描いたものである。



蒟蒻につゝじの名あれ太山寺（明治廿五年）

松山から一里ばかり離れた處に三津といふ港があつて、それが其時分松山から他に旅行する時の唯一の港であつた。現在は高濱といふ港が其近傍に出來て、其方に汽船が主として發著するやうになつたのであるが其頃は未だ其處は一漁村に過ぎなかつたのである。其の三津の近傍

に太山寺といふ山があつて、そこには太山寺といふ寺がある。蒟蒻が其處の名物であつてそれを太山寺蒟蒻といつて、松山あたりの人々は特に賞玩して居た。そのまた太山寺には鄙躅の花が見事であつた。そこで蒟蒻には太山寺蒟蒻といふ名前があるが、又つゝじ蒟蒻といふ名前があつてもいゝではないか、と戯れて言つたものであらう。私の子供の時分には太山寺蒟蒻といふのは名物であつたが、今は果してどうであらうか。鄙躅の花も尙盛りであるかどうか。

短夜や、砂土手いそぐ小提灯（明治廿五年）

「砂土手」といふのは、松山の東郊にある土手であつて、その上には櫨の木などが植わつてをつたやうに思ふが今はどうであらうか。私の子供の時分にはよく其邊に遊びに出かけたものである。それは松山城の要害の爲に築かれたものであるといふ話を聞いたことがある。道後とか石手とかいふ村から松山の町まで提灯をつけて、その砂土手を越えて急いで來る人がある、夏の夜の樣をいつたものである。其頃の田舍道は眞の暗で提灯が道を照らす唯一の頼りであつたことは無論である。

涼しさや馬も海向く淡井坂（明治廿五年）

淡井坂といふのは、松山市街から河野村の柳原へ行く途中にある小山を越える峠を言ふのである。その峠の裾はすぐ瀬戸内海の波が打ち寄せてゐるのである。その峠を越す時分には可なり汗をかいて上つたのであるが、峠の上には茶店が一二軒ある、其茶店に休むと海の方から吹いて來る風が非常に涼しい、繋いである馬も海の方を向いてその涼風を滿喫してをる、といふのである。淡井は今は粟井と書いてをるやうに記憶する。柳原のすぐはづれの酉ノ下といふ所に私は幼い時分八年間居たことがあるので、自然この粟井坂は度々越えたことがあるのである。松山の方から行つて粟井坂を越えたところが粟井村であつて、その次の村が鹿の峰といふ村である。

鹿の峰の紺屋なほあり豆の花　虚子

とあるのはその鹿の峰村のなつかしい記憶である。そこに一二軒の紺屋があつたことを子供心に記憶してをつたが、其後幾十年か經つた後にそこを通つて、まだ其紺屋が存在してをつたのを知つた時の句である。

唯今は國鐵がこゝを通るやうになつたので海岸の方を切り開いてそこに軌道を敷き、人道も

その傍に通ずるやうになつてをる。從つて粟井坂を通る人は殆ど無く、粟井坂といふ坂があることを知る人も少いであらう。松山地方から吟行に出かける人などは、一度この粟井坂を越えてみて鹿の峰あたりまで歩いてみるのもよからうと思ふ。鹿の峰あたりは往來の左右にある古松の並木が大へん好い眺めである。

陣笠を著た人もある田植かな（明治廿五年）

明治維新を隔つることがあまり遠くない時分の事であるから、俄かに祿にはなれた藩士達が田園に移り住んで俄か百姓になつた人が多かつた。士が祿にはなれると商工になるのを潔しとしないで農になるといふことは昔からの習はしであつて、自然松山藩にもさういふ人が多かつたのである。現に私の生家の父などもその一人であつた。この句はその俄か百姓の一人が田植をする時分に陣笠を被つて、他の菅笠を被つてをる人々の中に交つてをつたといふのであつて、其の時分の歸農した人々の様子が出て居てほゝゑまれる。現に私の父なども畑に出る時分に、百姓がするやうな頬被りはしないで、撃劍をする時分に面の下に手拭で頭を包む――昔は髷が

1012
177

あつたから其髷のこはれぬやうに手拭で頭を包んだものである――その包み方で頭をくるんで居つた、といふ話である。世の中に一大變革のあつた時分にそれに漂はされる人々の様が描かれてをる。

鯊釣りの大加賀歸る月夜かな（明治廿五年）

大加賀といふのは、三津ケ濱つゞきになつてをる處であつて、そこは埋立をしたのか或は新らしく開いたのか大加賀新田といふ稱呼で呼ばれてをつた。其大加賀に鯊釣りに行つて松山に歸つて來る時分には夜になつて、折節明るい月夜であつたといふ句である。

蛇落つる高石かけの野分かな（明治廿五年）

岩波文庫の「子規句集」には「高石がけ」と濁つてゐるが、それは「高石かけ」の校正の誤

りである。これは高い石崖といふ意味ではなく、高石かけといふ固有名詞である。松山城は市中に聳え立つてをる可成り高い山の頂きにあるのであつて、其城山の北の麓に當つて、もと牢獄のあつた所を、高石かけと呼んでゐた。それは名の示す如く高い石崖があつて其上に牢獄があつたものであらうが、其語源はともあれ、私達は高石かけと呼んで居た。日の充分に當らない陰森たる感じのする場所である。其邊には蛇が多くて、野分の時などは蛇が落ちることがあるといふ句である。

ていれぎの下葉淺黄に秋の風（明治廿五年）

これは松山市の南郊に高井といふ字の所があるが、そこにのみ生ふる「ていれぎ」といふものを詠んだ句である。これは古來から伊豫の名物の一つとされてゐるものであつて、そこに湧く清冽の泉の流れに生えてゐるものである。刺身のツマなどに使ふ歯切れのいゝものである。まつ青なくき〳〵と力強い葉のものであるが其下葉は淺黄になつてをる、と、秋風の吹く頃の樣を言つたものである。

冬枯や蛸ぶらさがる煮賣茶屋（明治廿五年）

現在ではかういふ景色を見ようと思つても何處にも見られないかも知らんが、私達の若い時分は東京の町外れか田舍に行くとよく見る景色であつた。煮賣茶屋と稱へる腰掛茶屋があつて、そこには一膳めしと稱へて茶碗に一ぱい飯を盛つたものを一錢とか二錢とかで客に賣り、又蒟蒻とか燒豆腐とかの煮〆、其に蛸の脚を一本いくらとかいふ値段で賣つてゐたものである。蛸は赤く茹でられたのが一匹ぶらさげられてゐる、其の脚一本を庖丁で切つて客の前に出すといつた有樣であつた。冬枯の時分になつてあたりが落寞としてをる中に、店先に蛸のぶらさがつてをる煮賣茶屋の光景は、懐しい感じのものであつた。かういふことは知つて居る人も澤山あるであらうが又知らぬ人も多からうと思つて、茲に解釋を加へたのである。

松山

掛乞の大街道となりにけり（明治廿五年）

これも、「大街道」といふのは大きな街道といふ意味ではなく、松山にある町の名前である。

松山の南北に通じてをる比較的廣い町であつて、それを大街道と稱へてゐた。今では名前が變つて小唐人町と云つて居るやうに思ふが、私等の子供の時分は大街道といふ名前の方が廣く行はれてゐた。其町はふだんは店が兩側に連つてゐて、物賣りなども澤山通るし、往來の人も澤山あるのであるが、大晦日の日暮れともなれば、掛乞が通るのが特に目立つて見えるといふ句である。其時分の年の暮れの感じも出てゐる。

萬歳や黒き手を出し足を出し　（明治廿六年）

これは別に解釋を要するほどのことではなくて、たゞ三河から出て來た萬歳が、今まで百姓をしてをつたので、黒い手足を出して舞ふといふだけのことであるが、これについて思ひ出すことは、子規の從弟にあたる藤野古白が或席上で「萬歳や黒き手を出し足を出し」とこの句を口ずさんで幾らか冷笑したやうな口吻を漏らしたことがあつた。子規はすかさず、「運命や黒き手を出し足を出し、ならいゝのだらう」と云つて笑つたことがあつた。その時分古白は早稲田の專門學校の文科に籍を置いてゐた。同じ組には島村抱月、後藤宙外等がゐて、坪内逍遙の

下に「早稲田文學」を出して、しきりに人の運命はどうだとかかうだとかといふことを言つてゐた。そこで子規は、こんなことを云つて古白の揶揄に逆襲したものであらう。子規と古白は從弟同志であつたけれど、互に相下らぬやうなところがあつた。此句についてそんなエピソードを想ひ出したから書いて置く。

四人の丸くなつたる餘寒かな　（明治廿六年）

松宇亭に桃雨猿男と會して

初五は「よつたりの」と讀むのであらう。忘れもせぬ明治二十六年の冬休みに、私は京都の高等中學に居つたのであるが、獨り思ひ立つて上京して、子規の寓居に滯在して居つたことがある。子規もその時分はまだ大學に籍を置いてをつたのであつたが、その寓居には老婆を一人雇うて自炊生活をしてをつた。子規は私の爲に、鳴雪、松宇、猿男、五洲等四、五人の人を集めて俳句會を開いてくれたこともあつたが、又一日は私を連れて王子の伊藤松宇の家を訪問したこともあつた。そんなことをこの句によつて思ひ出すのである。その時分子規は松宇と共に「俳諧」と稱へる雜誌を出してゐた。それは、二號きりでおしまひになつたけれども、その時

分は自然松宇と往來が頻繁にあつたことも想像せられるのである。

毎年よ彼岸の入に寒いのは（明治廿六年）

母の詞自ら句になりて

これは、お母さんの言葉が其儘俳句になつてをるといふことに興を覺えて書き留めて置いたものであらう。「毎年よ」といふのは、「毎年のことよ」、といふ意味である。「暑さも寒さも彼岸迄、といふ言葉があるのに、彼岸の入になつてこんなに寒いのは珍らしいではありませんか。」と子規は病床にあつて寒さの身に耐へるのを感じながらいふと、お母さんは、「毎年よ（毎年のことよ）彼岸の入に寒いのは。」と多年經驗して居られることとて感激もないやうにさも當り前のことのやうに言はれた。子規は、自分の病床にをつて寒さを強く感じたのに對し、あり觸れたことのやうに言はれた爲に強く頭に響いた。然もその言はれた言葉を口の中で繰つて見るとちやんと十七字になつてゐる。興味を覺えて之れを自分の句帳に書き留めたといふのである。「毎年よ」といふ言葉は東京地方などでも、違ふ言葉かも知れないが、松山では「毎年よ。」とか、「毎年あるのよ。」とかいつて、「よ」に特別のアクセントがあつて、斯ういふ言葉をよく違ふのである。

摘草や三寸程の天王寺（明治廿六年）

是は天王寺が三寸程だ、といふのではなくて、天王寺の塔が三寸程に見える、といふのである。摘草をしてをると遙か遠方の方に天王寺の塔がぽつんと小さく見えてをる、といふのである。併し乍ら作者の得意な處は、「三寸程の天王寺」といつて、それが天王寺の塔を現し得た處にあるのである。多少月並がゝつた技巧といつてもいゝものである。子規には往々にして月並がゝつた技巧が存在してをる。子規は月並から入つて自分で苦心して、それを打破することに骨を折つたのである。是等は月並の技巧といつてもいゝ方である。今の若い人々でも輕く笑つてその技巧に感服する程度であるかも知れない。今の若い人も往々にして月並の句を作ることがある。それは月並が其人々にとつては珍らしいのであつて、子規がそれを脱するのに骨を折つたといふ事を全く知らないのに坐するのである。

白魚や椀の中にも角田川　（明治廿六年）

此句の「椀の中にも角田川」といつた處も矢張り月並的技巧である。句の意味は隅田川の畔りの茶寮で御馳走を食べて居る、外には隅田川が流れてをる。お汁の中には白魚がある、その白魚は隅田川で採れたものである、椀の中にも亦隅田川がある、といつたのである。前の天王寺とよく似た月並的技巧である。

すり鉢に薄紫の蜆かな　（明治廿六年）

前に解釋をした「白魚や椀の中にも角田川」が、月並の系統を引いてゐるものとするならば、この句は今日の俳句の先頭に立つものといふべきであらう。それは何んの趣向もあるわけではなく、たゞすり鉢の中に蜆が入れてあるといふだけの句である。只その蜆貝の色が薄紫であると見たのが、貝の色に薄紫を見出した作者の詩があるといふ事がいへるのである。寫生句の發足は此の邊から來てゐると言へるのである。さういふ意味で、前の句のあとに此句を見出したことに特に興味を覺えるのである。

十三の年より咲いて姥櫻　（明治廿六年）

秋色櫻

秋色といふのは其角の弟子であつて、十三の小娘の時分に上野の花を見に來て清水堂のほとりに井戸があつた、その井戸のそばに醉つぱらひが居たのを見て、「井の端の櫻あぶなし酒の醉」といふ句を作つて、それから有名になり、その井の端にある櫻を秋色櫻と呼ぶやうになつた。明治年間も矢張り秋色櫻と稱へる老木の櫻のあつたことを私も覺えて居る。此頃はもうなくなつてゐるのであらう、それらしいものを見掛けぬやうに思ふ。此句はその秋色櫻を詠じたものであつて、句の意味は、十三の年から咲いた櫻が今はもう九十百の姥ざくらになつてゐるといふのである。井の端の句を詠んだ時の秋色の十三といふ幼い年と、子規の見た秋色櫻といふのが老い朽ちた姥櫻であつたことを思ひ合せて、かういふ句を作つたものと思ふ。頓智の句であつて、俳句の正道とはいへないのであるが、斯ういふ句は子規は旨い方であつた。無味淡白な寫生句に慊らない人は、却つてかういふ句に感心するかも知れない。矢張り舊い方に屬す

る句である。

櫻狩上野王寺は山つゞき　（明治廿六年）

今でも上野王子は山つゞきであることは變りないが、今は同時に人家つゞきになつてをるのである。其頃は途中にぽつ〳〵と百姓家が散在してをるくらゐであつて、其間は畑や林であつて、山つゞきと云ふ言葉がいかにもふさはしかつたのである。

根岸

ふら〳〵と行けば菜の花はや見ゆる　（明治廿六年）

上根岸富横丁の子規の家を出て、ふら〳〵と歩いてゐるうちにすぐ菜の花の咲いてゐる田舍道に出る、といふのである。其頃の根岸は文人墨客の好んで居を卜してをつた所であつて、此句にある如く、散歩でもしてをるとすぐもう田圃に出て、向ふには三河島（今の尾久あたりか）の村が見えるといふやうな有樣であつたのである。

松陰はどこも錢出すあつさかな　（明治廿六年）

これは、子規が芭蕉の奥の細道のあとを訪ねて徒歩旅行を試みた時の句である。非常に暑い時分であつたので、暑さとか涼しさとかいふ句が其時の句の中で多くを占めてゐるのである。暑い街道を歩いて行つてをるうちに、大きな松の木の突つ立つてゐる所に出て、そこは涼しさうであるから休まうと思ふと必ずさういふやうな所には床几が出してあり、客を慰ます茶店のやうなものがある、とさういふことをいつたのであつて、松の根に腰を掛けて愚ひのまゝ涼風を滿喫しようと思つても、それが出來ないやうになつてゐて、殆ど無錢旅行に近い旅をして居つた子規にとつては、却つてそれが不自由にも感ぜられたのである。その心持を暑いと云つたのである。

素香郎松に兵閑栖

すゞしさや月に二人の亭主あり　（明治廿六年）

素香・孤松といふのは兄弟であつて、素香といふのは兄さんで學校の先生であり、孤松とい

ふのは弟で、山縣公爵の幕下であり、京華日報といふ新聞の主筆であつて、碧梧桐は一時この新聞の社員であつたことがある。その二人とも無妻であつて、一緒に住つて居つた。そこを子規が訪うた時分に出來た句である。無妻であつて兄弟二人が仲良く一つ家に住つて居ることを面白く思つた心持が、自然この句の中に現れてゐると思ふ。

王寺松宇亭

すゞしさや隣をとへば正一位（明治廿六年）

伊藤松宇の家が、王子の稲荷の社の隣りにあつた。私も子規につれられて一度其家を訪ねたことがある。どちら隣りであつたかは記憶にない。この間、王子へ何かの會の時分に行き、暫くぶりに稲荷の社の前を通つた。松宇の邸はどちら隣りであつたのかと思つて見たけれども判らなかつた。尤も松宇が王子に居たのは明治年間である。其後家が建ち變つたかどうか判らない。只稲荷神社の模樣は昔と變らないやうな心持がした。

瑞巌寺

政宗の眼もあらん土用干（明治廿六年）

瑞巌寺といふ寺は政宗の開基だと聞いて居る。從つてそこの寶物の土用干をする時に當つては、政宗の片眼もあるであらうと言つたのである。世に獨眼龍政宗と謳はれたほどの人であつて、片眼は無かつたのである。從つてその片眼は寶物にでもなつてゐるのであらうか、と戯れていつたのである。が、此句の心持のうちには、お宮やお寺の寶物の中には隨分コヂ附けたいかゞはしい物が澤山ある、瑞巌寺の寶物も矢張り同じ樣なものであらうか。其中には政宗の片眼だと云ふ寶物もあるであらうかと、子規のいくらか冷やかしたやうな心持もあることが伺はれる。

蚊をたゝくいそがはしさよ寫し物（明治廿六年）

子規は字が上手であつた。從つて寫し物をするといふことは少しも苦痛でなかつたやうだ。人から借りた俳書などをよく寫して居つた。それもたゞその傳寫すのでなくて、子規一流の天

文・地理・動物・植物・人事といふ風に分類して寫し取るのであつた。「太祇句選」を幸堂得知が持つてゐるといふことを聞いて、それを人を介して借覽し、分類して寫し取つた事もあつた。それに一家二十句と稱へて、古今の俳人の優れた句二十句づゝを寫し取つたものもあつた。それは慥か守武・宗鑑を始めとして碧梧桐や私にまで及んでゐたことを覺えて居る。それに第一浩瀚な「俳句分類」の筆寫本は子規が坐つた高さよりも尙多いくらゐに積み重ねてあつた。之れは故人の俳句を洩れ無く網羅しようといふ企てゞあつて、子規の手許に一たび渡つた俳書は悉く分類して、この「俳句分類」の中に收め寫されたのであつた。斯の如く寫し物といふものは殆ど子規の生涯を通じて離るゝことの出來ない仕事であつた。年を經るに從つてその字畫はだん〳〵正しくなつて一字一畫もいやしくもしなかつた。夏の夕暮になると、根岸は蚊の多いところであつてぶん〳〵とその周圍を飛んでをる、子規は寫し物をしながら煩はしさうにこの蚊を拂うてをる、けれども蚊に食はれてもさほど苦痛を感じないらしく、尙ほ寫し物の筆をとゞめない、そんな光景は私もよく見るところであつた。この句はさういふ處をいつたものと思ふ。

子子の蚊になる頃や何學士（明治廿六年）

子規は大學で文科を專攻して居つて中途で退學したのであつた。その同級の者は間も無く文學士として世間に出た。其後輩の者も續々と文學士となつて世間に顏を出した。子規は病氣のためもあつたけれども自ら恃む處があつて中途で退學してしまつたのであつたが、其等同級の者や後進の者が文學士といふ肩書を獲て世間に持て囃されてゐるのを見て、多少の感慨がなくもなかつた。子子が蚊になる頃が來れば、大學生も何學士といふ肩書が附くやうになるのである、殊に蚊になつてぶん〳〵唸るやうな時になればぶん學士になるのである。と云ふ多少反抗的な嘲弄的な意味もまじつた句であると思ふ。

下闇や八丁奥に大悲閣（明治廿六年）

明治二十五年の十一月に、私は子規と嵐山に舟遊したことがあるが、其時、舟を下りて大悲閣に登つたかどうかはつきりした記憶が無いのである。かたゞ子規が、「花の山二丁登れば大

悲閣」といふ、芭蕉の句のあることなどを話題に上せたかと思ふ。この句は、その芭蕉の句の二丁とある距離を訂正したやうな句であつて、なか〳〵二丁どころではない、木下闇を縫うて大悲閣まで登つて見たが八丁もあつたらうか、といふのである。大悲閣は私も訪ねたことがあつて、角倉了意の木像の眼が光つてをつたことを覚えて居る。

青梅や黄梅やうつる軒らんぷ　（明治廿六年）

「軒らんぷ」といふものも若い人々には説明をしないと判らんやうな時代になつた。此頃は街燈といふものがあつて、明るく道を照らしてをるが、昔は四角い硝子張りでブリキの屋根の出來てをる中に石油ランプが這入つてゐるものが軒先にあつて、その光の下に表札を讀んだり又町を歩くのに便宜を得たものであつた。尤も繁華な町になると瓦斯燈のあつた所もあるが、根岸のやうな淋しい場末になると、明治二十六年頃は、まだ石油ランプであつたやうに記憶して居る。梅雨の頃でもあらうか、黄熟した梅やまだ青い梅の塀の上にかぶさつてゐるのに其ランプの光が映つてをるといふ景色であつて、もの靜かな上根岸あたりによく見た景色である。

くひながら夏桃賣のいそぎけり　（明治廿六年）

桃を賣りに來るのは東京邊でもあつたことかも知れないが、此句を見ると私は、松山の町を思ひ出す。士族屋敷に桃の木があつてそれが熟した時分になると、商賣人が來て一木の桃をいくらと値を附けて買つて行く。やがてその桃は、「桃はいりませんか、もゝもゝ」と云つて賣りあるく呼び賣の男に擔がれて市中にひさがれる、さうして其男は、自分も桃を食ひながら、いそぎ脚に、「もゝもゝ」と賣り歩いて居る。こんな景色を子供の時分に松山でよく見たことを思ひ出す。士族屋敷の桃を買ふといつたが、必ずしも士族屋敷の桃に限つたことはない。田舍から持つて來た桃でも差支はない。たゞ其桃を食ひ乍ら呼び賣をして急いで行つてをる景色をいつたものである。其頃松山には現在のやうに水蜜桃などはまだ出來なかつた。固い桃で、ときにはヤニを吹いてをる、にが桃などもあつたことを覚えて居る。

瓜ぬすむあやしや御身誰やらん　（明治廿六年）

瓜盗人を見つけた時分に極めてあやしい風體をしてゐる、併しどうも下賤な者とも思へぬ、お前は士族のなれの果か或は妖怪變化の類か、と此の瓜盗人に特に興味をもつて呼びかけた句である。「あやしや御身誰やらん」と、時代風にいつたのが、此の句の山である。それはお能の或る文句を思ひ出すやうな言葉である。

我はまた山を出羽の初眞桑（明治廿六年）

關山の茶店にやすんで

關山といふところの茶店に休んだ時、眞桑瓜があつたのを食べた、この眞桑は初眞桑である。旅をして山を越えて出羽の國に出てはじめてこの眞桑を食ふのである、と其眞桑のうまかつたこと、旅の茶店の一情趣を詠つたものであるが、此句は「山をいでは」と言つたところが山である。出羽（では）の國といふところを、山を出づるといふ言葉に引つかけて、山を出で羽といつた處が興味である。

梶の葉に雜の歌書く女かな（明治廿六年）

七夕をまつる時分に梶の葉に歌を書くことは昔からの習はしである。其には七夕の歌とか戀歌とかいふものを書くのが普通であるが、この女は一向そんなことには無頓著に只雜（ぞう）の歌を書くと、其ことに興味をもつて言つたのである。

蕣の入谷豆腐の根岸かな（明治廿六年）

入谷の朝顔といふのは名所になつてゐて、此頃でも尚あるかどうかは知らないが、併しある にした處で昔程名高いものではないのであらう。扨て「豆腐の根岸」といふのは、昔根岸の音無川のほとりに笹の雪といふ豆腐屋があつて、これも大變名物になつてゐた。入谷の朝顔を見て歸りに根岸の笹の雪で朝飯を食ふといふのが、その道の通な人の習はしとなつてゐた。其事をいつたものである。笹の雪といふのも今は所が變つて名ばかりが殘つてゐるかと思ふが、豆腐料理は形ばかりで他の料理もする普通の料理屋となつてゐた。それも私が五六年前に一度そ

こに行つたのではじめて知つたのである。今はどうなつてゐるか。

葬や君いかめしき文學士（明治廿六年）

（漱石來る）

朝顔は立派な花をつけてをる、漱石は新たに文學士になつてやつて來た、といふだけの句であるが、子規も大學につゞけて居さへすれば共に文學士となつたのである。自分から好んでゞはあつたが、併し病氣のためもあつて、大學を中途退學した。前にも「子子の蚊になる頃や何學士」といふ句があるやうに、もとの同窓生が何學士といふ肩書を背負つて世の中に出て來るのを見ると、多少の感慨が無いでもない。殊に親しい交りを呈した漱石が、文學士といふ肩書を持つてけふ改まつて子規のところへ來た、といふやうな感じである。

葬に今朝は朝寢の亭主あり（明治廿六年）

この句はおそらく東北の旅を終へて歸つた時の句であらうと思ふ。子規は元來朝寢坊であつた。それといふのも、夜更かしをして仕事をする癖があつたので自然朝寢をする傾きになつたものであらう。子規の留守中はお母さんも妹さんも、朝早く起きて拭掃除も早く出來る日がつづいたのであるが、子規が歸つて來ると、旅疲れもまじつて忽ち朝寢の主人がある家になつた、と云ふことをいつたものである。

嵐雪の黄菊白菊庵貧し（明治廿六年）

之は人も知る如く嵐雪の句に、「黄菊白菊その外の名はなくもがな」といふ句がある。其の嵐雪は黄菊白菊を賞美した意味でいつたのであるが、自分の家には、贅澤な他の菊は無い、唯黄菊白菊があるばかりである、と佗びた心もちをいつたのである。

鄰からともしのうつるばせをかな（明治廿六年）

瑞南氏住居に離れはべり

芭蕉破れて書讀む君の聲近し（明治廿六年）

前句の「鄰り」といふのは、陸羯南の家をいふのである。芭蕉は子規のうちの庭にあつたのか、或は陸の家の庭にあつたのか、はつきり記憶に無い。どうも子規の家の庭には芭蕉はなかつたかと思ふ。これは多分陸の家の庭にあつた芭蕉であつたものかと思ふ。――この句の表から見ると、子規の家の庭にあつたものととれはするが――ともかく隣の家のともしびが子規の家からよく見える芭蕉に映つてをる、といふのである。子規の家と陸の家とは垣一重を隔てた許りであることがよく描かれてをる。

後の句は、羯南は昔の漢學者流に書物を讀む時分に聲を出して讀む癖があつた。芭蕉も破れるやうな秋になつて大氣の澄んだ頃になると、その羯南の書物を音讀する聲が近く聞えるといふ此句も亦境を接してをる樣が描かれてをる。前句は目で見た景色から後句は音の感じから。

たらちねのあればぞ悲し年の暮（明治廿六年）

自分ひとりならば年の暮が來た處で別に屈托もないし氣易いのであるが、只老母があるために世間並に年の暮らしく貧乏らしく屈托をするのである。と赤貧といふ程ではなくとも有福でなかつた暮らし向きを嘆じた句である。

草庵

薪をわるいもうと一人冬籠（明治廿六年）

此句は私の好きな句である。しみ〴〵した感じの出てゐる句として、屢〻推奬したことがある。自然讀者のうちにも馴染の多い句と考へるが一應略解をしよう。子規は妻帶はせず、病床に横たはつてゐる哀れな身の上であつたのであるが、又其一人の妹さんも嫁入りはせず子規の看護に當つてをつたのである。冬になると親子三人の、まことに冬籠りといふ言葉にふさはしい暮らしがはじまるのであるが、その妹さんは藥餌の世話をする許りでなく纖弱い女手で薪を割るといふこともする、と言ふ其佗しい境涯をいつたものである。

父母います人たれ〳〵ぞ花の春　（明治廿六年）

この句は解釋するにも及ばない句であるかも知れない。しかし子規は幼にして父を失ひ、母の手で養育された人であると言ふことを考へて見ると、父母の揃うて健在な人は誰々であるかと云つた處は、多少自分の境遇を詠つた心もちがあるのであらうかと思はれる。

灯を消して元日と申す庵かな　（明治廿六年）

子規は夜更かしをして仕事をし明け方近くから眠つて雲前に起きる、といふやうなことが常であつた。時によると夜つぴて起きて居て翌日になつてから漸く眠る時もあつた。此句は、その子規のふだんの習はしを知つてゐなければちよつと解し難い句であつて、朝になつて、夜つぴて點してをつた灯を消して、あゝけふが元日であつた、と言つた句である。徹夜して書物を讀んだり筆を執つたりすることに馴らされてをつたといふことも、子規の腦をいためたる原因であつたものだらうとも思はれる。併し子規はさういふ昔の文學者らしい行動に興味を覺えてをつたところもあつた。

春日野の子の日に出たり六歌仙　（明治廿六年）

これは一篇の想像畫であつて、奈良の春日野の子の日には小松を曳くために堂上の縉紳達が出てきらびやかなことであつたらう、小野小町も出れば、柿本人麿も出、山邊赤人も出れば僧正遍照も出るといつた風に六歌仙に出て來るやうな人々が皆出て、さぞ美しいことであつたらう、といふのである。

立石や道折り曲る冬木立　（明治廿六年）

この「立石（たていし）」といふのは地名だと思ふ。松山から今治に行く街道にあつた村の名かと考へる。そこの所には木立があつて道が曲つてゐるのであらうかと想像する、私は實際そこの景色は知

らないのであるが、もしさういふ景色があることが確められゝば仕合せである。

根岸草庵

冬枯や隣へつゞく庵の庭（明治廿七年）

子規の根岸の家は、もと前田侯の別邸のあつた地面の一部に建つてをるのである。別邸の跡にたくさんの貸家が建てられ、其一つの家を借りて住んで居つたのである。だから表は鶯横丁といふ小さい道に面して居つたが、裏戸を開けるとすぐそこには別な借家があると言つたやうな有様である。それをいつた句である。

寶生新朔の「谷行」を見て

三月を此能故に冴え返る（明治廿七年）

寶生新朔といふのは今の寶生新の先々代に當る能の脇師であつて、近代の名人といはれた人

であつた。此人は子規の義理の叔父に當る藤野漸といふ人の謡の師匠であつて、老後或夏松山の藤野氏の宅に行つて居つたこともあるのである。そんな關係から自然子規もこの新朔には親し味を覺えてをつて、其能を覽る機會もあつたものと思はれる。「谷行」といふのはワキの重い能であつて、新朔がその「谷行」を演じた時の、其技に感じて此句が出來たものと思はれるのである。

絶えず人いこふ夏野の石一つ（明治廿七年）

此句は別に解釋を要する爲に取り出したわけではない。私が其當時大變この句が好きであつたといふ記憶がある爲に一言して置きたいのである。たゞ夏野にある一箇の石を描いた許りであるが、其石は丁度休むのにいゝ場所にあるので、そこを通る旅人が其處に來ると必ずその石に腰を掛けて休むやうなことになる。旅人は常に變るのであるが然し此處に來る人は必ずその石に腰をおろして休む、それは絶えず繰り返されてゐる、といふ句である。

谷中

猫の塚お傳の塚や木下闇　（明治廿七年）

これは谷中の墓地に、一時新聞の三面記事的に有名であつた毒婦高橋お傳の墓があり、又猫の墓がある。毒婦とうたはれた高橋お傳の墓が何々侯爵とか大臣大將とかの墓に雜つてあり、又猫の墓が人間の墓に雜つてあるところに面白味を感じて作つたものであらう。現に私と二人共墓地を通つて居つた時分に、子規が私に高橋お傳の墓を知つておいでるか、と言つて私を其處へ導いて行つたことがあつたことを覺えて居る。

碧梧桐盧子を伴ひて

初秋や三人つれだちてそこらあたり　（明治廿七年）

子規は私達を伴つて三河島あたりを散歩したことは一再ならずあつたやうに思ふ。これも其時の一つであつたと思ふ。この頃の子規はまだ腦は丈夫な方であつて、私等がたづねると急に立ち上つて其邊を散歩して見ようと言つて氣輕く出掛けるのであつた。襟卷をぐる〳〵と頸に

卷きながら俎のやうな大きな下駄をつゝかけて出て行く樣子がまだ目に殘つてをる。その、心の輕ろやかな漫歩の心もちがよく出てをる。

動物園

秋高く魯西亞の馬の寒げなり　（明治廿七年）

これは、福島中佐がシベリヤを横斷して歸つた其時、曾て乘つてをつた馬が倒れた爲に途中からロシヤの馬に乘つて歸つた。その記念に其馬を動物園に提供した。それが福島中佐の斯くの馬であるとして檻に入れてあるのを私も見たことがある。

秋はまた春の殘りの三阿彌陀　（明治廿七年）

彼岸に東京では六阿彌陀詣といふことをよくすることになつてをる。その六阿彌陀のうち三阿彌陀は春の彼岸にお參りしたが、殘りの三阿彌陀は秋の彼岸にまたお參りするといふのであ

る。

月の根岸闇の谷中や別れ道　（明治廿七年）

御院殿にて鳴雪不折根岸に別る

此時分不折はまた根岸に居を構へる前であつて、湯島であつたかに偃蹇して居つたやうに思ふ。鳴雪は本郷眞砂町十八番地の常盤會寄宿舍の舍監をして居た。御院殿といふのは上野から上根岸に下りる坂であつて、鳴雪・不折と連れ立つて一日どこかに散歩してをつたのが、その御院殿で別れる時分に鳴雪は谷中を通つて本郷に歸り、不折はどちらに行つたのか此句では不明瞭であるが、子規は根岸の家に歸つたのである。根岸の上は月が明るい、谷中の方は墓地の立木が澤山あつて暗い、其事をいつたものである。

芋阪も團子も月のゆかりかな　（明治廿七年）

芋阪は名物の團子あり

上野の芋阪を下りた所に團子を賣る店があつて、芋阪の團子といつてこれは名物になつてゐた。子規の歿後毎年の子規忌に、遺族はその團子を大龍寺に持つて來られて集つた者に振舞はれることが習はしになつてゐたが、昨今はこの團子の店がなほ存續してゐるかどうか。

柳散り菜屑流るゝ小川かな　（明治廿七年）

根岸川

根岸と日暮里との境を流れてをる小川を音無川といつてをつた。秋から冬になるとそこで百姓が大根や葱を洗つてをるのをよく見掛けたことがある。私が家を持つたはじめは、この小川を前にした家であつた處から殊にこの句の感じが深い。この川は今は暗渠になつてゐると聞いてをるが、果してどうであるか實際見ないから判らない。

阪は木の實乞食此頃見えずなりぬ　（明治廿七年）

御院殿

この御院殿といふのは、前にもいつた通り、上野公園を拔けて上根岸の子規の宅へ行かうとする時分に、必ず通らねばならぬ阪であつた。私は何百遍何千遍此阪を通つたか判らない。今は陸橋が出來て自然此阪も昔とは形を異にしてをるが、其時分は乞食がよく其處に居たことを覺えてをる。しかしそれも餘り寒くない時分のことであつて、木の實が落ちる秋の末頃からはもう居なくなつてしまふのであつた。其事を言つたものである。

武藏野や畠の隅の花薄　（明治廿七年）

この句の意味は解釋しなくても明かであるが、明治二十七年頃はまだ東京近傍に武藏野の面影を見ることが出來たのである。併し私が武藏野探勝を思ひ立つて東京の近郊に出て見ると、全く昔日の面影がなくて、人家が建てつんで居るか工場が建つてをるかして、もう武藏野のあとを訪ねることは殆ど出來ないのに驚いたのであつた。此句を特に取り出したのは、子規の生前はまだその面影が殘つてをつた事を一言したいが爲である。

團子阪菊花傳

あはれ氣もなくて此菊あはれなり　（明治廿七年）

團子阪の菊人形といふのは昔は有名であつたのであるが、此頃は國技館に本物を奪はれてしまつた。がその國技館も永く續くかどうか判らない。今は團子阪には一軒の植木屋に菊を作るところがあるさうであるが、菊人形は無いさうである。

芽狩山淺くいくちばかりなり　（明治廿七年）

「いくち」といふは鄕里の松山あたりで言ふ言葉であつて一般には通用しないかも知れん。それは笠が灰色をしてぬろ〳〵してゐて、食へない菌である。初芽や濕地芽を採りに行くと、その「いくち」といふ芽が澤山あつて、よく踏みにじられて居ることがある。

稲の穂や南に凌雲閣低し　（明治廿七年）

凌雲閣と言ふものを知つて居る人はもう少いかも知れぬ。浅草公園の中にあつた十二階の建物で、見物人をその上に登らして遠望させたりして子供や田舎の者などを喜ばせて居た。その建物は震災の時分に倒壊してそれから無くなつてしまつた。南の方にその凌雲閣が低く見えるといふのであるから、これはその頃また田圃であつた今の尾久邊か、もしくは對岸の向島邊から言つたものかも知れぬ。

青々と冬を根岸の一つ松　（明治廿七年）

根岸には御行の松といふ有名な松があつた。たしか中根岸の音無川の附近にあつたやうに思ふ。今はもうこれも無くなつてゐるであらう。

雛師に寄す

隻手聲絶えて年立つあしたかな　（明治廿八年）

この雛師といふのは多分愚庵の事であらう。隻手の聲と言ふのは禪の公案の一つである。

石手寺にまはれば春の日暮れたり　（明治廿八年）

石手寺といふのは松山の東郊にある道後溫泉のその又東にある寺である。眞言宗で、由緒ある古い寺である。建物も保護建造物になつてゐて、小規模ながら堂塔伽藍の布置も面白く出來てをる。この句は子規が松山に歸省した時分に恐らく道後の方へ散歩に行つて、それから更に足をのばして石手寺迄行つた、ぶらぶら行つたものだから春の日も遂に暮れ方になつた、といふのであらう。

亡き古白を思ひいでゝ

春の夜のそこ行くは誰そ行くは誰そ　（廿明八年治）

古白は前にも言つた通り子規の従弟である。子規は一時、その古白の父の藤野邸に居たこともあるといふことを聞いた。子規の話によると、古白は坊ちやんらしく育てられて　生活も比較的華美に、多少暴君らしいところもあつた、といふことであつた。がそれは幼い時のことであつたのであらう、私の知つた時分の古白は　早稲田大學の文科の第一期生であつて、非常に寡默なおとなしい方であつた。早稲田大學を卒業したに拘らず、子規の従軍中、自殺をして死んだのである。生前の古白に就いては、子規はあまり好感を持たなかつたやうに見えたが、自殺をして後の古白に對しては、さすがに哀愁の思ひを寄せてゐたやうである。殊にその自殺といふことに對しては關心事であつたやうに思ふ。又、自分の死といふことに對しても、常に古白を聯想してをつたらしい。この句はその心持をいつたのである。春の夜にそこを通つてをるのは誰か〳〵、古白ではないか、といふやうな多少恐れをいだいてその人を見送つたやうな心持の句である。

出代や尾の道船を聞き合せ　（廿明八年治）

之は松山を中心にして考へて見ねば一寸判らんやうな句である。此頃はどうか知らんが、以前は尾の道から松山に通ふ船が普通な航路となつてゐたのである。松山から尾の道まで船で來て、それから汽車で東京に來るといふやうな順序であつた。之は松山の女を東京の家の女中に置いてをつたのが松山に歸ることになつたので、尾の道から出る船の時間等を聞き合したといふのでもよからう。又、尾の道近傍の女が、松山に女中に行つてゐて、それが出代る時分に尾の道通ひの船のことを聞合せたといふのでもよからう。

首途やきぬ〳〵をしむ雛もなし　（廿明八年治）

日本新聞社樓上に從軍の酒宴を張りて吾を送らる折ふし三月三日なりければ雛もなしといふ題を皆々詠みけるにわれも筆を取りて

これは、たま〳〵「雛もなし」といふ題に對し自分の境涯を詠じたものであつて、妻帶もせずにある身上である、と言ふことを言つたのである。次にある、

花咲いて妻なき宿ぞ日をしき　（明治廿八年）

といふのも其境涯を嘲る如くいつたのである。

錢湯で上野の花の噂かな　（明治廿八年）

子規の家には風呂といふものは無かつた。近所の錢湯に出掛けるのであつた。

故郷はいとこの多し桃の花　（明治廿八年）

松山

子規は父方の親戚はあまり多くなかつたやうに思ふ。佐伯とか歓原といふのは父方の親戚であつたやうに思ふ。が、母方、即ち大原家の親戚はかなり澤山有つた。故郷に歸つて見ると、

いとこは大變に多いことを今更の如く感じたといふので、桃の花の咲いてゐる時分に親戚の者が何かにつけて會合する場合の所感である。

碧梧桐の東歸を送る

短夜を眠がる人の別れかな　（明治廿八年）

明治廿八年の七月、神戸病院を出て須磨の保養院に移ることになつた時分に、碧梧桐は子規の母君を連れて東京へ歸り、私は子規に附いて保養院まで行つたのである。其時の子規の留別の句である。子規は別に碧梧桐に對して介抱を感謝する、といふ意味のことを言つたのではないが、自から此句のうちにその心持が汲み取れないことはない。子規は二十九歳、碧梧桐は二十三歳で、諸共に青年であつたのであるが、子規は大病後で、朝も早く目覺めがちであるのに人一倍強健な碧梧桐は、朝起きるのを濫るのは當然なことである。が其事をいつて別れを惜む心を言つたところに師弟の情の潜んでゐることは爭はれない。

夜を起きて人の晝寢ぞすさまじき　（明廿八年）

これはひとのことを言つたのではなく、子規自身のことをいつたのである。病氣になつて後も人の寢靜まつた夜に仕事をして、日の出かゝつた時分から晝寢をするといふのが子規の習慣で、まして病氣にならんうちはさういふ日の續くことが多かつた。子規の健康は自身で惡くしたものといつてもいゝのである。

川狩の鐵輪を見たる咄かな　（明廿八年）

「鐵輪」といふのはお能にある。子規と藤野漸といふ義理の伯父さんの感化でお能も見たこともあらうし少くとも謠は聞いたことはあつたのであらう。尤も鐵輪といふのは謠の文句そのまゝ地唄であつたかに取り入れてあるので、世間の者もよく知つて居るのである。嫉妬のために頭に鐵の輪を嵌めてそれに澤山の蠟燭をともし、丑の刻參りをして恨みの人を呪詛するといふ、怖ろしいことを描いたものである。

須磨保養院即事

夕涼み仲居に文字を習はする　（明廿八年）

須磨の保養院にをつた時分の子規は、ひとりで退屈なまゝに手習をして居つたこともある。其時、仲居といつていゝのか保養院に雇つてある女が子規の部屋にも來て用事をしてをつた。それに勸めて手習をさせた、といふのである。子規は京都の俵屋に泊つて居つた時分に、高雄の紅葉をハンケチに寫さうとして砧盤で叩いてをつた、それを若い女中は立つて柱に凭れて見て居る、それを私が見たときにはなんとなくローマンチックな感じを受取つたことがあつた。仲居に手習をさすといふことも同じやうな感じを受取るのである。子規にはさういふ一面も有つたかと思ふ。

緣側に棒ふる人や五月雨　（明廿八年）

これは森鷗外のことを言つたものである。鷗外が運動のために棒を振つてをるといふ話を聞

いたことがある、その驛外を想像して作つたものであらう。

高濱海水浴

薫風や裸の上に松の影（明治廿八年）

私の姓とおんなじに高濱といふ港が、郷里の伊豫にある。そこに別府廻ひの汽船が著いて、そこから電車で松山に行くやうになつてゐる。私の家と何か關係のある土地かとよく人に聞かれるのであるが、全くそんな事はない。私の子供の時分は漁家が數軒ちらばつてゐる全くの寒村であつたのであるが、そこに港を築いて汽船の發著所にするやうになつてから、舊藩時代の港であつた三津ケ濱より、今では他國人にはよく知られてをるやうになつた。其港は潮が深くて海水浴には適さないが、それから少し隔つたところに梅津寺といふ寺が一軒あつて、その前が、一面に松原になつてゐる。其處の海岸が遠淺で海水浴に適してゐる。夏になると此處に假停車場が出來て松山から來る人を澤山に吐き出すのが常である。この高濱海水浴とあるのは恐らくその梅津寺のことを言つたものであらう。

神戸市鍊磨郡高濱にて

夏山にもたれてあるじ何を讀む（明治廿八年）

河東碧梧桐には三人の兄さんがあつた。其仲兄が竹村といふ所へ養子に行つてゐた縁と言ふ人であつた。黄塔とも鍊磨ともいつてゐた。大學の選科を出た人で、神戸の學校の國文の教師をして居た。謹直な學者であつた。子規は神戸の病院に入院して居る時分に何かと世話になつた。それで一日そこを訪つれて厚意を謝したのである。其家は中山手通りに在つた。だんだん道が上りになつてゐる其中途で、夏山に凭れると言ふのはそこから出て來たのである。

松山郊外

我見しより久しきひよんの茂かな（明治廿八年）

松山南郊の藥師といふところには清冽な清水が湧いてゐるのである。夏の暑い晩などはその清水を一杯飲むのがたのしみで、子供であつた私は兄夫婦につれられてそこに行つたこと等の記憶が蘇つて來る。其處には非常に古い大きなひよんの木があつた、それが夏は葉が茂

つてをつて、その下藤に立つといふことも亦涼しい思ひ出である。

ありながら桑の實くらふ木曾路かな　（明治廿八年）

子規は果物が大へん好きであつた。其事は子規の「くだもの」といふ文章に自から書いて居る。その「くだもの」といふ文章の中にたしか此句で現したことも書いてあつたかと思ふ。木曾路を旅行して居る時分に、道ばたの桑の實をとつてそれを喰ひながら歩いて行つた。子規の果物ずきであるといふ事が此句の背景をなしてをる。

碧宮居　貧

若竹や豆腐一丁米二合　（明治廿八年）

子規は貧賤に居るといふことを自ら誇りとして居つた。誇りといふよりも富貴に近づくことを恐れて居るといふ傾きがあつた。氣位は非常に高く、自ら人の師を以て任じて居つたのであ

るが、貧に居るといふ事が其志を成す上に於て大切なことである、といふ考への下にあつた。此句は些かこの志を述べたものである。

古白の遺屍に入りたる　子に寄す

尻の跡のもう冷かに古疊　（明治廿八年）

明治二十八年頃の早稲田の專門學校といふものは、まだ、きはめて規模の小さいものであつた。私が知つて居る頃の此學校は木造の粗末な小さいものであつた。古白は其學校の文科を卒業して其年か翌年かに自殺をして死んだのである。私は仙臺の第二高等中學を退いた後、東京に出て坪内博士のセークスピアの講義が面白いといふ評判のあつた處から、それを聽くために早稲田の文科に入學して籍を置いたことがある。其時分、古白が長く下宿して居つた南豐島郡下戸塚村の素人下宿屋を借りてそこに入つた。其時、子規がくれた句である。古白は子規の從弟であつて、その自殺したといふ事は子規の心を刺激した一事であつたのである。私はまた其死んだ古白を懐しむやうなローマンチックな感じも手傳つて、その古白が長く居つたといふ下宿に暫くの間居つたのである。

觀山翁の墓に詣で、

朝寒やひとり墓前にうづくまる　（明廿八年）

大原觀山先生といふのは子規の母堂のお父さん、即ち子規のためには祖父に當る人で、松山の漢學者としては偉い人であつたやうに聞いて居る。子規もこの觀山先生には敬虔な心持を持つて居たやうに思ふ。この句は其心持を詠つたものである。

正宗寺一宿を訪ふ

朝寒やたのもと響く内玄關　（明廿八年）

正宗寺といふのは松山の末廣町といふ所にある禪寺である。此處には現在子規堂といふ建物がある。そこには子規の埋髮塔、鳴雪の髮塚等がある。今はそれらのために俳諧巡禮の札所と言つたやうなものになつてゐる。その正宗寺には現在京都妙本寺の長老の一人である釋佛海といふ人が其頃ゐた。其時分はまだ若い坊さんで、一宿と號して俳句も作り、松風會員の仲間であつた。私も同席して一緒に俳句を作つたこともあつた。此の一宿を、或る日子規が訪ねた時

分に、正宗寺の庫裏の内玄關で「頼のもう」と言つた、其聲がかあんと響いた、といふ句である。此句も現在の正宗寺の玄關の這入口の丸い石に刻まれてをる。これも正宗寺の俳蹟の一つになつてをる。因みに、その子規が訪ねた頃の正宗寺は燒けてしまつた。久しく假建築のまゝであつたが、現在の住職の盡力で淨財を集めて昨年であつたか其再建が成就したのであつた。

長き夜の面白きかな水滸傳　（明廿八年）

三國志とか水滸傳とかいふ豪快な物語は子規の最も好む處であつた。寢られぬまゝに水滸傳を繰返して讀んで、その豪快味を味つてをつた子規の面影が髣髴する。

客舍に臥して

行く秋の腰骨いたむ旅寢かな　（明廿八年）

この客舍といふのは奈良の宿のことである。其奈良の宿で腰骨の痛むのを感じたといふのが

脊髄カリエスのはじめであつて、爾來子規はその苦痛に堪へかねて病床に呻き苦しんだ。又その死期を早めたのも此の病のためであつた。新橋に歸り著いた子規を迎へた時、すぐれぬ顔色をして、腰骨が痛くて困る、と言つた面影がまだ目に殘つてをる。

旅人の盗人に逢ひぬ須磨の秋　（明廿八年）

須磨の保養院に居た時分に小泥棒が入つて、なにかを盗つて行つたといふことを話してをつたことがあつた。

病起杖に倚れば千山萬嶽の秋　（明廿八年）

再生の悦びに杖に縋つて立ち上つた時の意氣軒昂たる樣が此句に依つて想像される。

あるが中に詩人痩せたり月の宴　（明廿八年）

この詩人といふのは漢詩人をいつたのである。子規の交友には新聞記者とか政治家とか歌よみとか俳人とかいふ者があつたのであるが、或る月の宴に集つた人の中で漢詩人が最も痩せてをつた、といふのである。この痩せたといふ心持には其詩人の風格が想像される。本田種竹山人などが連想される。

秋風や高井のていれぎ三津の鯛　（明廿八年）

（故郷の松山にくひたもたいひし人もありとか）

この「高井のていれぎ」を詠んだ句は前にもあつたのであるが、これは伊豫節と稱へる俚謡のなかに松山地方の名物として算へられてゐる。その俚謡といふのは「伊豫の松山名物名所。三津の朝市道後の湯。晉に名高き五色素麺。十六日の初櫻。吉田のさし桃小かきつばた。高井の郷のていれぎや。紫井戸の片目鮒。薄墨櫻や緋の燕。ちよつと伊豫絣」それはごく清冽な泉のほとりに生えてをる水草であつて、この前にも言つた通り刺身のつまなぞに用ゐられる。

秋の山御幸寺と申し天狗住む　（廿八年明治）

これは松山の北郊にあつて、御幸寺と書いて「みきじ」と訓むのである。岩骨の露出してをる山であつて、稀に松が生えてをる。その山の姿がさも天狗でも棲んでをるであらうと思はれる形をしてをる。此山に登らうとして墜落した者がありでもした處からそんな噂を生んだものであらうか。とにかく私も子供の時分、御幸寺には天狗が棲んでをると言ふことを聞いて、恐ろしく感じてをつたものである。

秋の山突兀として寺一つ　（廿八年明治）

常信寺といふ寺は松山の東北郊に在つて、道後と向合つてゐる山の裾にある寺なのである。そこには松が澤山に生えてをつて景趣に富んでをる。此寺は舊藩主久松家の菩提寺ときいてをる。

浦屋先生村莊の前を過ぎて

花木槿雲林先生恙なきや　（廿八年明治）

この浦屋といふ漢學の先生はよほど子規の興味を惹いた先生であつたやうに思ふ。破れた袴、古びた帽を著けて歩いてをられる茫漠たる相貌には、時折私も接したことがある。嚴格な態度で素讀などを教へられるのであらうけれども、世事には極めて疎い老儒であつたことと思はれる。

小さくといへる女能役者を見て

男郎花は男にばけし女かな　（廿八年明治）

照葉狂言といふものが明治の始め頃に行はれてをつたといふことを聞いてをる。それは男女合同の一座であつて、能の中に俗曲を加へて演奏するので、はじめは嚴肅な能の形式で進行していつて途中から急にくだけて三味線が入り能衣裳を附けたまゝで踊りになり、またあとでは能の形式に立戻るといつたものであつた。私は物ごゝろの附いた時分に小もとといふ肥つた女が其殘黨として後ちに話す今様能狂言といふものゝ中に出演してをつたのを記憶して居る。た

しか仙助とかいふのが上手であつたといふことを、父母の話に聞いたことがあるやうに思ふ。その一行は加賀の出身であつたやうに聞いたと思ふ。松山地方も能樂が相當に旺んな土地であつたので、よくこの照葉狂言の一座も松山に來てをつたものと思ふ。それが後になつて泉祐三郎・小さくといふ夫婦の一座が今樣能狂言といふ名前に改めて照葉狂言の遺髮を嗣いで松山によく興行に來たものである。祐三郎といふのは百藝に堪能で能のシテはもとよりのこと脇もやれば狂言もやり、太鼓も打てば笛も吹く、それに踊も踊るといつたやうなわけで、三十日囃子といふ狂言なぞは最も得意としてやつてをつた。小さくといふのは實生流の謠を立派に謠ひ、シテの型も立派であつた、大概シテ方に廻つてをつたが踊も亦立派であつた。その娘のお房といふのも驚といふのも父母の仕込みで能もやれば狂言もやる、踊も踊つた。その娘二人は現在大連に住まつて居て、各々良家の主婦となつてゐる。私は大連に行つた時分に二三度逢つたことがある。「照葉狂言」といふ小說が泉鏡花の作にあつたやうに思ふが、加賀の出身である鏡花が、鏡花らしい題材を照葉狂言といふものゝ中に見出したといふことは、さもあるべきことと思はれるのである。大へん前置きが長くなつたが、この句は今の小さくといふ今樣能狂言の女役者を見て作つたといふ前置で、その女役者は男の役にもなるといふことを興じていつたものである。

漱石虛子來る

漱石が來て虛子が來て大三十日（明治廿八年）

漱石と子規との交友は密であつたし、漱石と私との交友も密であつたのであるが、子規・漱石・虛子と三人が出逢つたことは極めて稀であつた。松山に子規が大學生であつた時分に歸省した、其時同じく大學の學生であつた漱石が訪ねて來た、其時私も行き合せて三人で出逢つた事が一度、それから此の時、即ち明治二十八年の大晦日に子規の根岸の家で漱石と私と一緒に出逢つたことが一つ。その他にはもう出逢つた記憶はないのである。

寒き日を書もてはひる厠かな（明治廿八年）

子規はよく厠にはひる時分に書物を持つて行つた。ゆつくり書物を讀んでゐてなか〳〵出て來なかつた。

煤はきのこゝだけ許せ四疊半（明治廿八年）

お母さんや妹さんは綺麗ずきでよく掃除をした。子規は書物や筆墨を散らかしたまゝで片附けることをしなかつた。煤掃をするにつけても自分の居間兼書齋である四疊半だけは除外してくれ、どうか許してもらひたい、と言ふのである。此頃書齋としてゐた所は實際は六疊であつた。

冬ごもり顔も洗はず書に對す（明治廿八年）

朝起きて顔も洗はないで、すぐ机に凭れることが多かつた。子規は皮膚の白い方であつたからあまり汚い感じはしなかつたが、頭を指で掻くと髪の間から白いふけが群り出て來るのをよく見た、子規は不精であつた。

冬籠書齋の掃除無用なり（明治廿八年）

これも前の煤掃の句と同樣書齋の掃除は無用と云ふのである。それには理由もあつた。掃除をする爲に心覺えの書籍の位置がかはつてゐたり物を捜してもなか〳〵見つからなかつたりするので、掃除をしたり片附けたりするのを非常に嫌つた。獺祭書屋主人と云つたのも、獺魚が魚を祭る即ち魚を捕つて亂雜に竝べて置く、其樣に似てをるといふのである。

手凍えて筆動かず夜や更けぬらん（明治廿八年）

前に言つたことがあるやうに思ふが、子規は病氣になつてからも夜更かしをするのが常であつた。

高縄と知られて雪の尾上かな　（廿八年明治）

高縄といふのは山の名前である。松山の北方三、四里の所に聳えてをる可成り高い山であつて、其處には河野氏の城が在つたといふことである。

なぐさみや花はなけれど松葉關　（廿九年明治）

郷里の風俗にちなぐさみといふことあり春季のころにもたれば さゝえ煙草など携へて親族友だちをさそひ合せ石手川の堤吉敷の土手其他思ひ〳〵の處に遊び女子供は兒赤鋼草に興を盡し老いたるは酒のみたがる兒童にかけまはる女子供を見てうち楽むあり

「松葉關」といふのは石手川の上流にある岩石の間に水は淵をなしそれから急湍をなしてゐる處である。もう一層上流に上ると湧ケ淵と稱する處がある。その湧ケ淵といふ處は名の示すが如く大分に大きな淵であるが、松葉關はそれに較べると女性的ともいふべき景色のいゝ所である。そこへ松山の子女達がお辨當を持つておなぐさみに出かけたものである。今はさういふこともなからう。

紅藤に贈る

鶯や垣をへだてゝ君と我　（廿九年明治）

子規の家の隣は藤羯南邸である。そこの書生を紅緣がしてゐたことがあるのでこの句を贈つたものかと思ふ。

松山十六日櫻

うそのやうな十六日櫻咲きにけり　（廿九年明治）

松山の北郊山越の龍穩寺といふ寺に、舊暦正月の十六日には必ず咲くといふ櫻がある。それは昔一人の孝子があつて、その父が死ぬる前に櫻の花の咲くのを見て死にたいと云つた。それを孝子が佛に祈願して早くも正月の十六日に花が咲いて父の生前に間に合つた。それから正月の十六日には必ず咲く、といふ言ひ習はしである。これを孝子櫻ともいうてをる。別に珍らしいものでも無いのか鎌倉の私の宅の庭前にもそれに似た櫻がある。寒櫻の一種でもあらうか。

連翹に一閑張の机かな　（明廿九年）

一閑張の机といふのは今はあまり見ないが、抽出しも何にもない、大概四角の、紙を張つて其上に漆を塗つた、瀟洒な持ち運びに樂な、ちやぶ臺代用にもなる机である。これが子規の家の什物であるが如き感じがして、ところ〴〵に置きかへられてあるのを見た。又一時子規の机であつたこともある。

信者五六人花輪かけたる棺涼し　（明廿九年）

これは耶蘇の葬式をいつたものであらうと思はれるが、虚飾がましいこともなく、業々しい式典もなく質素な心からな葬といふ感じがして作つた句であると思ふ。子規は後年自分の葬式のことを文章に書いたことがある。それには、何の飾りもない棺を三四人の人が代り合つて擔いで、とぼ〴〵と田舍道を行つてをる、といふやうな記事であつた。そこで子規が亡くなつた

時分に私等は出來るだけ質素にして、私等ばかりが柩を擔いで寺に持つて行くやうにしたいと考へたのであつたが、遺族の人の反對によつて決行されなかつた。此句によつてその事を思ひ出した。

われに法あり君をもてなすもぶり鮓　（明廿九年）

われに方法がある、君をもてなすにもぶり鮓をもつてするといふだけの句であるが、もぶり鮓といふのは松山あたりでいふ言葉であつて東京でいふ五目鮓のやうなものである。人參や椎茸をきざんでそれをまぜることをもぶると云ふのである。他の地方でもいふ言葉かもしれぬ。

長き夜や孔明死する三國志　（明廿九年）

三國志の華は孔明である。孔明が生きて居る間は劉備の軍は磐石のやうな感じがして頼もし

い。その孔明が出て來ると必ず神籌鬼謀で華やかな場面が展開する。病氣の孔明は死にさうでなか〳〵死なない、が遂にそれは死んで了ふ、がつかりする、といふやうな感じを言つたものであらう。子規は斯ういふ英雄譚には興味を持つてゐた。

我ねぶり彼なめる柚味噌一つかな　（明治廿九年）

子規が明治二十六年日本新聞に入る前に京都に來て、私と一緒に嵐山に遊んだことがある。これは其時であつたか、もしくは國元からお母さんと妹さんを連れて上京して來る時であつたか、はつきりした記憶はないが、子規が產寧坂の愚庵を訪ねたいとのことで私を誘つて行つたことがあつた。その時京極で柚味噌を賣つてゐるのを見て子規はそれを買つて手土產とした。愚庵はなか〳〵よく話す方で、自分の身の上から落飾に到つたいきさつなどを話すので、子規は興にのつて歸るのも遲くなつた。傍らに煮え立つてをる釜の名を聞いたら「淨林」と言つた。「淨林の釜に昔を時雨れけり」といふ句を作つたのはその時であつた。さうして子規が持參の柚味噌を直ちに取り上げて自ら指をつゝ込んで一と掬ひ舐めて見て、「これは旨い」と言つて子規に勸めた。子規も亦指をつゝこんで舐めた。其時の柚味噌に對する愚庵の擧措は頗る子規の興味を惹いたらしく、あとで話をして興がつて居たことがあつた。この句は明治二十九年の句であるから大分おくれて出來た句であるが、恐らく其時のことを回想した句であらう。

露月調手を嚼る

澁柿は馬鹿の藥になるまいか　（明治廿九年）

この嚼るといふ意味は多少馬鹿にしたやうな處もあるのであるが、併し其人を愛する餘りに出た言葉のやうに解する。「露月よ、お前は醫者になるやうな柄ではない、文章を以て世に立つべき人のやうに思はれるが、それでもお前は醫者になつた、それでお前に聞く、澁柿は馬鹿に興へる藥にはなるまいか。」とからかうやうに言つたのである。

柯中

碧梧桐のわれをいたはる湯婆かな　（明治廿九年）

碧梧桐は子規の病床にあつては何くれと世話をした。常識に乏しいやうな處はあつたけれども、それでも氣のついたことはよく世話をした。湯婆はぬるくは無いかとか何かといつてそれを取換へてくれたといふことをいつたものであらう。

病中

小夜時雨上野を虛子の來つゝあらん　（明治廿九年）

子規は病中屢〻私に來ることを要求した。常てかういふことを言つたことがある。左千夫のやうな大きな男がどかと枕頭に坐つてをると、壓迫せられるやうな心もちがして氣が重くなるが、虛子のやうな小さい男が坐つてゐるのは少しも障りにならん、とかういふことを言つた。碧梧桐がそれを聞いて、「のぼさんは虛子がすきなんだ。好きだとは言へないもんだからそんな理窟をおつけるのさ。」とさう子規の面前で言つて笑つたことがある。子規が息を引取つた直後の枕頭に坐つてをられた母堂が、まづ私に向つて、「生前はいろ〳〵お世話さまになりました。」と挨拶された後に傍らにあつた親戚の譽見夫人を顧みて、「昇は淸さんが一番すきであつた。」とさう言はれたことがあつた。もしさうであつたとするならば、私は子規に惜負したところが多かつたかも知れないのである。此句も私を待つてゐる心持を詠つたものであらうと思ふ。

愛秋山眞之米國行

君を送りて思ふことあり蚊帳に泣く　（明治廿九年）

秋山眞之は後に有名な日露戰爭の日本海海戰に連合艦隊の參謀であつた人、子規よりは一歲年下であつたかと思ふが共に松山出身の人として相許して居つた仲であつた。其人はだん〳〵出世して海軍士官として米國へ行くことになり、子規は望を抱きながら、病の爲に動くことも出來無い體である。思へば感慨無量である。何氣なく談笑して別れたのであるが、後ち一人蚊帳の中にあつて泣くといふ句である。世間では秋山は子規の感化によつて彼の「此の日天氣晴朗なれども浪高し」といふやうな名文を書いたといふことを言つてゐるやうであるが、それ程文章の上で感化を及ぼしたといふことはあるまいと思ふ。元來秋山の父といふ人が文華の才のあつた人で松山叢談といふ舊藩の歷史を編んだ位の人であるから、其の感化の方が大きかつたであらうし、もと〳〵天才的の人でもあり漢文の素養もいくらかあつたことゝ思はれるから、

自らあれ位の文才はあつたことゝ思はれる。それに子規との交遊に文學の交渉があつたといふことは聞いて居らぬ。

根岸名所の内

芋阪の團子屋寢たりけふの月（明治廿九年）

根岸とあるが、日暮里である。前にもこの芋阪の團子の事はいつたが、其頃日暮里の芋阪のもとに有名な團子屋があつた。しかし今はどうなつたか。羽二重團子といつて平べつたい團子を串にさして賣つてゐた。餡をつけたのと、醬油をつけたのと兩方があつた。其後大龍寺で子規忌の俳句會を催す時、子規の妹君が必ず此の團子を屆けられるのが慣はしであつたことも、先述したと思ふ。此團子屋では煮豆や煮〆なども賣つてゐた。

根岸名所の内

鶯横町塀に梅なく柳なし（明治年）

鶯横町といふのは子規の家のあつた所である。家數も數軒の小さい狹い横丁である。鶯横町といふと大へん美しい横丁らしく聞えるけれど、實際は板塀の中には梅も柳もない、といふのである。

碧梧桐歸京

團扇出して先づ問ふ加賀は能登は如何（明治卅年）

碧梧桐は竹村秋竹が金澤の高等學校にあるのを訪ねて出掛けて行つたことがある。碧梧桐は元來旅行すきであつたけれども私と京都の近郊を歩き廻つた以來、東京では二三近郊をさまようたのみで餘り旅行をしなかつたやうであるが、この時不圖思ひ立つて金澤まで出かけて行つた。後年三千里の旅を思ひ立つたのも或は此旅行が原因であつたかも知れないのである。子規は病床に横たはつてゐて元來好きな旅をすることも出來ない。碧梧桐が金澤まで遠出をしたといふことは病床の子規の興味を唆るものが多かつた。碧梧桐がその旅行から歸つた時分に子規は喜び迎へて其旅中の狀を聞いたのである。

冬さびぬ藪澤の竹明月の書（明治一年）

共に百年餘り前の松山の名筆である。藪澤は武士、明月は坊さん。子規のうちの藏幅には格別のものも無かつたが、唯藪澤の竹、明月の書とがあつた。其明月の書は私が家を持つた時分貰ひたので愛藏してゐる。其藪澤の墨竹は今何十年一日の如く子規舊廬に懸つてゐる。

初午に鶯春亭の行燈・かな（明治一年）

根岸にある料理屋に鶯春亭といふのがあつた。今は其名殘もあるかどうか。私が子供の時分の江戸名所繪双六といふのに、根岸に鶯春亭といふ料理屋が出て居つた。其程名高かつたものと見える。子規が住まつてゐる時分にはたいした料理屋とも思はなかつた。其所の料理を子規がとりよせて御馳走してくれたこともあつた。

やゝ寒み文彦先生髯まだら（明治一年）

元光院觀月會

其外にも元光院觀月會と前置きした句は澤山あるが、これは恐く日本新聞社長の陸羯南の主催であつたのであらうが、當時日本新聞を中心とした新聞記者、政治家、文士などの會合を名月の夜上野の元光院で催したものである。當時病床にあつた子規も誘はれたので、病を推して出向いたのである。所ういふ會合には出られるか出られぬかわからぬと思はれた子規の事であるから、大變興を催して澤山の句を作つた。文彦先生といふのは大言海の著者大槻文彦のことである。該句を貯へてあたこの老學者の風貌を描いたものである。

桐の葉のいまだ落ざる小庭かな（明治一年）

ホトトギスを東京に移して發行するやうになつた時には、神田小川町の今文といふ牛肉屋の裏の家に居つた。其家に病中の子規は俄にたすけられて突然やつて來た。近所に居た碧梧桐も

呼んで三人で歓談したことがあつた。子規の機嫌もよかつた。私等兩人もはしやいだ。今考へても愉快な一日であつた。其庭に桐の木があつたのである。

爐開や故人を會すふき膾（明治一年）

大根を荒く刻んで膾にしたものを、郷里の松山ではふき膾といふ。他郷にも通じる言葉にや。

冬籠る今戸の家や色ガラス（明治一年）

子規は赤い色を好んだ。今戸にある役者の家などには、色ガラスをはめた障子がしまつてをつた。其色ガラスが特に子規の眼にとまつたものと見えて、其役者の家のことは私に話したことともあつた。又今戸界隈にさうした家が並んでをることも子規の興味を惹いたものであらう。

雪の繪を春も掛けたる埃かな（明治二年）

新井愚哉といふ畫家も俳句を習つて子規の家に出入して居つた。或時其畫いた雪の繪を子規の許に持參した。子規は其の繪を欄間にかゝげた。其繪は幾年もかゝげた儘になつてゐた。現在も尙かゝげた儘になつてゐることゝ思ふ。

さそはれし妻を遣りけり二の替（明治二年）

介抱にのみ携つてゐた妹さんが、いつか人にさそはれ芝居を見に行つた。子規は病牀の心細さになか〳〵妹さんを手離さなかつたのであるが、これは珍らしいことであつた。其時の心持を妻として詠じたものであらう。因に其妹さんは子規歿後、其晩年になつてよく友なる人と共に芝居に行つてゐられたといふことである。

五女ありて後の男や初櫻（明治二年）

陸湯南の家庭のことを言つたものかと思ふ。女の子許りであつたのが湯南先生の晩年になつて一男子を得たといふことは大變な喜びであつた。尤も陸の家庭に限らず、斯ういふことはよくあることである。

蕃椒廣長舌をちぎめけり（明治二年）

子規は鳴雪を長者として尊敬してゐたが、併し、一旦議論となるとなか〳〵受けてゐなかつた。鳴雪も亦子規の病人であることは忘れてゐるわけでもないが、一旦議論となるとまけてゐなかつた。それで二人が議論を上下する段になると、風雲を捲き起こしてとどまる所を知らなかつた。たゞかこれは興津移轉問題から、來客を謝絶することについての議論であつたかと思ふ。其翌日になつて鳴雪から病人である子規に對してあまり激論をして申譯無いといふ手紙が

來たのに對し、子規も詫狀を認め其終りに附記した句である。

風呂吹の一きれづゝや四十人（明治二年）

（村記氣るオの四十餘人）

これは既に何かに載せたことがあるが、此時分四十人の集會といふことは俳句會では珍らしいことであつた。殊に子規庵の八疊と六疊――其六疊には子規の病床が横つてゐる――の二間に集うたのであるから、病む人を驚かせ喜ばせたことは大變なものであつた。其狹い處所で人人に食はせる風呂吹を作るといふのも、たとひ一切れづゝでも難ぎであつた。子規の俳句も漸く盛になつたといふことを思はせたものである。

千駄木に隱れおほせぬ冬の梅（明治二年）

これは森鷗外を讃めて作つた句かと思ふ。鷗外は自ら千駄山房主人とも言つてゐたので圖子

阪の上の千駄木に住んでゐた。「柵草紙」つゞいては「日ざまし草」といふ雑誌を出してゐて殆ど自分一人で筆を執つてゐて、當時の文壇を縱横に批評してゐた。其武者振りは雄々しいものがあつた。子規は其態度を讃めて此句を作つたものと思ふ。因に鷗外は漸く世間が其態度に反抗しつゝあるのを知つて、後に自ら「鷗外を葬る」といふ文章を發表して、其から辛辣な筆はとらなくなつたのである。

病床の匂ひ袋や浅き春（明治三年）

子規は自分の病床の臭氣を氣にしてをつたものかと思ふ。匂ひ袋をつけてゐたといふことは記憶にないが、この句によつてそんなこともあつたらうといふ想像がつく。

草庵

春寒き寒暖計や水仙花（明治三年）

子規の枕頭には寒暖計が置いてあつた。此の寒暖計を眺めて其日の寒さによつてストーヴを焚くのであつた。又唐水仙が鉢に入れて置いてあつた。

京庵

春雨や裏戸明け來る傘は誰（明治三年）

子規の病床からはガラス戸を隔てゝ裏戸が見える。子規は私に斯んなことを言つたことがある。あの締まつてゐる裏戸が開いて誰か來るであらうかといふことを想像して見ると面白いと。これは誰か病床を尋ねてくれる人があればと待設けてゐるやうな心持があつてのことであらうと思はれてあはれであつた。尤も子規は厭な人が來ることは人一倍厭がつて居たが。

春の日や病牀にして繪の稽古（明治四年）

子規が病牀にあつてせめてもの慰安の爲、畫を描くことをはじめ、其畫もなか〳〵見るべきものがあつたことは人の知るところである。元來子規は幼い時分から畫心があつたらしく、一寸した雜文集の表紙などに筆に任せて繪を描いたものがあるやうに記憶する。が後年爲山、不折などから西洋畫の講釋を聞いてから、寫生といふことを俳句文章等に應用し共に一生面を開いた。さうして病牀にあつて畫を描くやうになつてからも一途に刻明に寫生をして、其畫も亦、素人畫としてゞはあるが、なか〳〵に一家の風格を供へてゐた。私は後に英吉利の博物館でゴツホの描いた向日葵や椅子の畫を見た時分に、子規の畫を思ひ出したのである。子規の畫は誰に習ふといふことなく、實物を枕頭に置いて草花や果物などを寫生したのである。畫の稽古とあるが其は師匠についての稽古ではなく、自分一人の稽古であつたのである。強ひていへば其師匠は寫生といふことであつたのである。

ランプ消して行燈ともすや遠蛙　（明治四年）

これは子規自身の境涯を言つたもので、其頃根岸には電燈が無く、ランプを點してゐた。それから子規が眠る時分になると、其ランプを消して行燈をともしたのである。行燈は一本の暗い行燈であつた。

母と二人妹を待つ夜寒かな　（明治四年）

母子三人の家庭で、子規の病は篤く、母は老いてゐた。妹君一人で重責を負うてゐた。其妹が偶々用があつて外出した。其歸りを待焦れてゐる樣である。

病牀の財布も秋の錦かな　（明治四年）

子規は或時私に言つたことがあつた。「病苦にあへいでゐる此頃は御馳走を食べることが、せ

めてもの慰籍だ。ところが金が無い。こゝに財布があるが、これを天井から釣り下げてこの中に御馳走を食べる金が這入つてゐると思ふと、せめてもの慰みになる。誰か其金を寄附する人は無いかと思うてをる」と。其後私の差出した若干金が其中に收められて久しくぶら下つて居つたと思ふ。何かこれについて仰臥漫錄に記事があつたと思ふ。

九月蟬椎伐らばやと思ふかな（明治四年）

子規庵の門を這入つたところに椎の樹があつた。その椎の樹に秋蟬の喧しく鳴き立つのを病床の子規は辛く思つたものであらう。

驚くや夕顔落ちし夜半の音（明治四年）

病床にあつた六疊の庭には夕顔棚があつて其所には毎年のやうに夕顔がぶら下つてゐた。其夕顔がひとりでに腐れ落ちた音が子規を驚かした。翌朝私が訪ねた時に「大きな音がしたのに驚いた。何の音かと思つたら夕顔の落ちた音であつた」と、物に襲はれたやうに話した。衰弱してゐた子規には餘程の衝撃を與へたものらしかつた。

雀の子忠三郎も二代かな（明治五年）

書簡御文略（加藤恒忠宛）

加藤恒忠といふのは外交官であつて子規の叔父である。其叔父の二番目の男子が生れた時に、自分の幼名の忠三郎といふのを其儘襲名さしたのに、子規は喜びの手紙を添へて此句を送つたのである。ところが此忠三郎君は子規の歿後、其あとを取ることになり（子規のあとは妹君が相續し、妹君のあとを忠三郎君が襲ふことになり）今は正岡忠三郎として此頃は俳句をも嗜んでゐるやうである。

母の花見に行き給へるに

たらちねの花見の留守や時計見る　（明治五年）

これも前にあつた妹の留守に其歸りを待ち焦れてゐるのと同じ意味で、老母がたま〳〵すぐ裏の上野の山の花見にいつたのを、待ち焦れて時計を見てゐる衰へた子規の樣が想像される。

律土筆取にさそはれて行けるに

家を出でて土筆摘むのも何年目　（明治五年）

律といふのは妹君の名前である。鄕國松山にあつては土筆を煮て食ふ習慣がある。――梅干を入れて煮るのである――その爲め春の野に出でゝ土筆を摘むことは子女の樂しみとも營みともなつてゐる。妹君も松山にあつた時分はよく土筆を摘みに行つたが、東京に出てからは其を摘みに行くといふこともなく、間もなく子規の病氣の介抱に全力を委ねてそれを摘むどころか、家を出るといふことも滅多になかつたのが、偶々人に誘はれて珍らしく家を出て土筆を摘みに

行つた、といふことをいつたのである。

絲瓜三句

絲瓜咲て痰のつまりし佛かな　（明治五年）

痰一斗絲瓜の水も間に合はず　（明治五年）

をとゝひのへちまの水も取らざりき　（明治五年）

辭世の句となると、死の感想を陳べたものが多いが、此の句は世を辭する時のたゞ事實を陳べた迄である。特に辭世の句と銘をうつたわけではないが、さう意識して句を認めたことはたしかである。併し唯其場合の寫生句である。それがいかにも子規らしい。十五夜に絲瓜の水を取るといふ習はしがある。子規が死んだのは十七日であつた。

昭和五年松山市文化倶合より復刊あり

目次

明治廿五年

元朝や皆見覺えの紋所……一
蒟蒻につゝじの名あれ太山寺……一
短夜や砂土手いそぐ小提灯……二
涼しさや馬も海向く淡井坂……三
陣笠を著た人もある田植かな……四
鯊釣りの大加賀鮨る月夜かな……五
蛇落つる高石かけの野分かな……五
ていれぎの下葉淺黄に秋の風……六
冬枯や蛸ぶらさがる煮賣茶屋……七
掛乞の大衿道となりにけり……七

明治廿六年

萬歳や黒き手を出し足を出し……八
四人の丸くなつたる餘寒かな……九
毎年よ彼岸の入に寒いのは……一〇
摘草や三寸程の天王寺……一一
白魚や椀の中にも角田川……一三
すり鉢に薄紫の蜆かな……一三
十三の年より咲いて姥櫻……一三
櫻狩上野王寺は山つゞき……一四
ふらゝと行けば菜の花はや見ゆる……一四
松陰はどこも餞出すあつさかな……一五

年代順

すゞしさや月に二人の亭主あり……一五
すゞしさや隣をとへば正一位……一六
政宗の眼もあらん土用干……一七
蚊をたゝくいそがはしさよ寫し物……一七
子子の蚊になる頃や何學士……一九
下闇や八丁奥に大悲閣……一九
青梅や黄梅やうつる軒らんぷ……二〇
くひながら夏桃賣のいそぎけり……二一
瓜ぬすむあやしや御身誰やらん……二一
我はまた山を出羽の初眞桑……二三
梶の葉に雜の歌書く女かな……二三
蕣の入谷豆腐の根岸かな……二三
蕣や君いかめしき文學士……二四
蕣に今朝は朝寢の亭主あり……二四
嵐雪の黄菊白菊庵貧し……二五
鄙からともしのうつるはせをかな……二五
芭蕉破れて書讀む君の聲近し……二六
たらちねのあればぞ悲し年の暮……二六
薪をわるいもうと一人冬籠……二七
父母います人たれ〳〵ぞ花の春……二八
灯を消して元日と申す庵かな……二八
春日野の子の日に出たり六歌仙……二九
立石や道折り曲る冬木立……二九

明治廿七年

多枯や隣へつゞく庵の庭……三〇
三月を此能故に活え返る……三〇
絶えず人いこふ夏野の石一つ……三一
猫の塚お傳の塚や木下闇……三二
初秋や三人つれだらてそこらあたり……三三
秋高く碧西亞の馬の褰げなり……三三
秋はまた春の殘りの三阿蘭陀……三三
月め根岸闇の谷中やゆかりかな……三四
芋阪も團子も月のゆかりかな……三四
柳散り菊屑流るゝ小川かな……三五
阪は木の實乞食此頃見えずなりぬ……三五
武藏野や高の間の花薄……三六
あはれ冠もなくて此菊あはれなり……三七
澤狩山澤くいくばかりなり……三七
稻の穂や南に淺雲閣低し……三八
宵々と多を根岸の一つ松……三八

明治廿八年

隻手辟絶えて年立つあしたかな……三九
石手寺にまはれば春の日暮れたり……三九
春の夜のそこ行くは誰そ行くは誰そ……四〇
出代や尾の道船を聞き合せ……四一
首途やきゝ〳〵をしむ離もなし……四一
花咲いて妻なき宿ぞ口をしき……四二
錢湯で上野の花の噂かな……四二
故郷はいとこの多し桃の花……四三
婦夜を眠がる人の別れかな……四三
夜を起きて人の甚寒そすさまじき……四四
川狩の鐵輪を見たる嵯かな……四四
夕涼み仲居に文字を習はする……四五
縁側に棒ふる人や五月雨……四五
濕風や裸の上に松の影……四六
夏山にもたれてあるじ何を讀む……四七
我見しより久しきびよんの茂かな……四七
ありきながら桑の實くらふ木曾路かな……四八
若竹や豆腐一丁来二合……四八
沉の跡のもう冷かに古疊……四九
朝寒やひとり蔦前にうづくまる……五〇
朝寒やたのもと響く内玄關……五〇
長き夜の面白きかな水滸傳……五一
行く秋の腰冷いたむ廣廣かな……五一
旅人に逢ひぬ紅勝の秋……五二
病起ては倚れば千山萬壑の秋……五三
ある中に詩人現せたり月の宴……五三
秋風や高井のていれぎ三百の餅……五四
秋の山御室寺と申して天狗住む……五四
花木槿雲林先生悲なきや……五五
男郎花は男にはけし女かな……五五
巖石が來て虚子が來て大三十日……五六
寒き日を書もてはひる剛かな……五七
煤はきのこゝだけ許せ四疊半……五八
冬ごもり顔も洗はず書に對す……五八

多籠書齋の掃除無用なり……五九
手凍えて筆動かず夜や更けゝらん……五九
高縄と知られて雪の尼上かな……六〇

明治廿九年

なぐさみや花はなけれど松葉蘭……六〇
鶯や垣をへだてゝ君と我……六一
うそのやうな十六日櫻咲きにけり……六一
連翹に一閑張の机かな……六二
信者五六人花輪かけたる棺涼し……六二
われに法あり君をもてなすもぶり鮓……六二
長き夜や孔明死する三國志……六三
我ねぶり彼なめる補味噌一つかな……六三
澁柿は馬鹿の魂になるまいか……六四
翠陰桐のわれをいたはる湯婆かな……六五
小夜時雨上野至虚子の來つゝあらん……六六
君を送りて思ふことあり蚊帳に泣く……六七
芋阪の團子屋寢たりけふの月……六七

明治卅年

鶯横町塀に梅なく鄙なし……六八
閑扉出しゃ先づ問ふ朋賣の蛍は如何……六九
多さびゝ藏澤の竹明月の書……七〇

明治卅一年

初午に鶯春亭の行燈かな……七〇
やゝ寒み文彦先生鼻まだら……七一
桐の葉のいまだ落ざる小庭かな……七一
蘆開や故人を會すふき膾……七二
多籠る今戸の家や色ガラス……七二

明治卅二年

雪の繪を春も掛けたる埃かな……七三
さそはれし妻を遣りけり二の替……七三
五女ありて後の男や初櫻……七四
番椒廣長舌をちゞめけり……七四
風呂吹の一きれつゝや四十人……七五
千駄木に隱れおほせぬ冬の梅……七五

明治卅三年

病床の匂ひ袋や淺き春……七六
春寒き寒暖計や水仙花……七六
春雨や裏戸明け來る傘は誰……七七

明治卅四年

春の日や病牀にして繪の譜古……七七
ランプ消して行燈ともすや遠蛙……七八
母と二人妹を待つ夜寒かな……七八
病牀の財布も秋の錦かな……七九
九月蟬椎伐らばやと思ふかな……八〇
鶯くや夕顔落ちし夜半の音……八〇

明治卅五年

歯の子忠三郎も二代かな……八一
たらちねの花見の留守や時計見る……八一
家を出でて土筆摘むのも何年目……八二
絲瓜咲て痰のつまりし佛かな……八二
痰一斗絲瓜の水も間に合はず……八三
をとゝひのへうまの水も取らざりき……八三

子規句解

昭和二十一年十月二十日初版印刷
昭和二十一年十月二十五日初版發行

定價金七圓

著者　高濱虛子
發行者　矢部良策　東京都日本橋區小舟町二ノ四
印刷者　花光正太郎　大阪市福島區海老江上二ノ四
版元　株式會社創元社　東京都日本橋區小舟町二ノ四　大阪市北區樋上町四五　振替口座東京一五六五番　東京五七〇九九番　大阪五七〇九九番　會員番號A一一九〇五一
配給元　日本出版配給株式會社　東京都神田區淡路町二ノ九

工文社（西大1019）印刷

1012
177
911.309
TA 81

百花文庫刊行書目

須田國太郎裝幀
B 6 判雅裝

〔既　刊〕

1. 山本有三　不惜身命　¥10.00
   附錄 漢字表
2. 吉井　勇　短歌風土記　8.50
   大和の卷 1
3. 穎原退藏　芭蕉の名句　3.00
4. 高濱年尾　俳諧手引　7.00
5. 谷崎潤一郎　三人法師　6.50
6. 太宰施門　フランス生活　8.50
7. 高濱虛子　子規句解　7.00
8. 小林秀雄　無常といふ事　7.00
9. 金子大榮　雜華錄　9.00

〔近　刊〕

木原　均　小麥の祖先
土井虎賀壽　抒情詩の厭世
　　—ゲーテからニイチエへ—
アンドレモーロア著 生島遼一譯　ヴォルテール
石田幹之助　長安の春抄
志賀直哉　早春の旅他二篇
谷崎潤一郎　幇間　他二篇
駒井　卓　「ダーヴィンの家」など
三宅正太郎　題未定（隨筆）
吉井　勇　短歌風土記
　　山城の卷
山口誓子　わが歳時記
大山定一　リルケ雜記
原　隨園　ギリシア文化
梶原三郎　衣・食・住
伊吹武彥　ヴァレリ釋義
窪田空穗
窪田章一郎　和泉式部
ホフマンシュタール 都築博譯　友の書

（以下續刊）

911.362
TA31
3

終